近松『薩摩守忠度』の作劇

――いくさ物語表現史（五）

山下宏明

一　全曲の構成

近松の時代物浄瑠璃、貞享三年（一六八六）初演の『薩摩守忠度』は、

としは寿永の秋の比、都を出でし時なれば、さもいそがはしかりし身の、〳〵心の花か蘭菊の、狐川にぞ着給ふ

で始まる。主役忠度の着きゼリフである。能の模倣によることを宣言する、いわゆる行の序である。

全曲は五段から成る。第一段「寿永忠度」では、忠度が和歌への執念から、都を落ちる一門とは別行動をとって京都へとって返す。その直前に忠度は、立ち去る京をふりかえって一門の零落を悲しみ、一の谷での討死を覚悟する。それゆえに和歌の道を思い出し、京へ一旦立ち帰るわけである。ところが早くも七条朱雀の権現堂で源氏の岡部六弥太と遭遇し、ここで両者の対決となる。組み敷かれた忠度が、京へ立ちかえったわけを話して、一時の助命を乞う。岡部は一旦迷うが、そこへ敵役の稲毛道善がかかわりそうになるため、岡部は忠度の申し出を承知して、一時、命を忠度に預けることになる。叙事詩としての語り物とは違って、この悪役が場を後へとつないでゆくドラマの手法である。訪ねゆく俊成邸に、求める俊成は不在で、かねて忠度と相愛の仲にあった俊成の娘菊の前が出であう。そこへ深夜になって悪役の稲毛が俊成邸を包囲して攻め、忠度の運命あわやと思うところへ岡部六弥太がかけつけ、稲毛を追い払う。以上が第一段であるが、忠度は俊成邸へと立ち返りながら、早々と岡部に遭遇し、後日の決戦を約束させる。これが一曲の主要なモチーフになるのであるが、これに恋人の菊の前と、主要なモチーフを妨害する稲毛を登場させて、物語進行の牽引力を設定する。世話物とは違って善悪の対立をドラマとする時代物の方法として、この悪役の稲毛を登場させ、ドラマを進める牽引力を演じさせるのである。全曲の状況を設定する序の段をなすものと云える。表題の小書「ばけたるおとこきつね川より」は、馬取に身をやつした忠度が、狐川から京へとって返すことを意味している。この段のモチーフは、

A　忠度と和歌

B　忠度と岡部六弥太の対決と約束
C　菊の前の忠度恋慕
D　敵役稲毛の悪態

である。

第二段「西国忠度」は、場所は須磨浦内裏。通りすがりの二人の女を忠度と越中前司盛俊が呼び止める。二人の女は浦の海女と名乗り赦されるが、内裏へ参り主上への拝謁がかなって、改めて三日月と曙の姉妹であると名乗る。忠度は三日月に、忠度の名歌で、第一段で俊成娘菊の前に最善の名歌と推された「旅宿花」の詠歌を短冊に書いて与える。忠度の情けに感動した三日月が持参する鎌で自害しようとしたので、あわてた人々が制止する。実は梶原のさしがねで内裏に放火しようとしていたのだと真相を語る。もとはと言えば、老いた舅の生活を支えるために梶原の甘言に服したもので、それが主上に拝謁がかない、忠度の慈愛に満ちたことばにあって、梶原の誘いに乗ったことを人間の迷い、あるまじき事と反省し悔しがったからであった。この第二段のモチーフは、

E　姉妹、特に三日月の参加と忠度の三日月への恩義。
　　これにAの忠度の詠歌がからまる。

それに

F　梶原の指示

である。表題に並記する小書の「しばをるむすめ山人とこそいふべけれ」の〈むすめ〉は、問題の姉妹であり、〈山人とこそいふべけれ〉は、素性を質された女が

　我々は此すまのうらのあまにて候

と答えたのを、忠度が怪しんで、

　いやあまとは心得ず。あまならばうらにこそすむべけれ。山あるかたにかよはんをば、山人とこそいふべけれ。

と言う。これに、女は

　山ざとにしばといふ物の候へば、しほ木のためにかよひくる、歌にも詩にもよみ給ふ。しほ屋のけぶりと御覧ぜよ。なふをろかの君やとわらひける。

と反論し、忠度を閉口させる。これは、世阿弥の能『忠度』で、ワキの、もと俊成に仕えていた旅僧が前ジテの老人に、

　いかにこれなる老人、おことはこの山賤にてましますか。

と問うのに、シテが

　さん候これはこの浦の海士にて候ふ。

と答える。これをワキが

　海士ならば浦にこそ住むべきに、山ある方に通はんをば、山人とこそいふべけれ。

となじる。これに対してシテが

　そも海士の汲む汐をば、焼かでそのまま置き候べきか。

と反論するのを利用したものである。

第三段「短冊忠度」では、岡部六弥太の弟五弥太が、負傷しながら大手の生田の森の陣に攻め寄せ、かねて衆道（男色）の仲にあっ

た越中前司盛俊との今生の別れをさせてくれと願い出る。この五弥太を、侍にあるまじき振る舞いと怒った盛俊がかえって対決を迫るが、猪股が仲に入り、結局猪股が盛俊を討ち取る。義経の逆落しの後、岡部六弥太が忠度を探し求めるところへ、忠度から短冊を受けていた菊の前と三日月が、忠度の身代わりとなって岡部に討たれようとする。岡部がそれと知って、あきれるところへ本物の忠度が現われ、約束通り岡部の手にかかろうと首を差し出す。そこへ悪役の稲毛が現われたものだから、三日月が忠度と名乗り出て、稲毛の手にかかって討たれる。情けをめぐる義理立てを描くものである。第三段は、身代わり悲劇の型をなすものである。この稲毛がまことの忠度を討ったと名乗りをあげ立ち去るので、岡部六弥太はそうはさせじと後を追い、菊の前を証人に立てて事実を頼朝に示そうと東下りを決意する。この段のモチーフは、

G　岡部五弥太と越中前司盛俊の衆道

C'　菊の前と三日月の忠度への献身。これはCとEの変奏である。

D'　敵役、稲毛の行動開始。これはDの変奏である。

小書「わかむしやすがたたんじやくを付られたり」は、いうまでもなく菊の前と三日月の忠度との情誼を指す。時代物のなかに世話物的性格を濃厚に見せる場である。

第四段「述懐忠度」では、稲毛が判官義経に三日月が持っていた短冊を示し、首は海へ沈めたが、かくのとおり忠度を討ったと言う。感心した義経が、その功績を記録に残し鎌倉の頼朝へ報告しようと言う。そこへ岡部六弥太が登場して忠度を討ったと言い、箙と短冊を指し出すが、判官はとりあわない。赤面した岡部が腹を切ろうとするのを菊の前がひきとどめ、真相を頼朝に申し出ようと決意する。ここで岡部と菊の前の道行きがあり、尾張笠寺に到着する。高野聖といつわり宿を借りようとするのを寂蓮が聞きつけ、これを怪しむ。六弥太が八幡へ参って不在中、菊の前を囲んで酒盛りするところへ、おりから臨月を迎えていた菊の前が急に産気付き、法師たちは狼狽するが、寂蓮の介添えで菊の前は男子を生む。ここで寂蓮は、相手の姫が歌の旧師俊成の娘だと知って、おりから立ち戻った六弥太も忠度の最後を語ったため、寂蓮と和解し、六弥太と菊の前は鎌倉へと発つ。この段のモチーフは、

D"　稲毛の功名奪いの企て

H　六弥太と菊の前の苦難。寂蓮の介添え

である。その小書「たびのかさでら花こそあるじなりけれ」は、六弥太と菊の前の道行き、笠寺到着と、忠度の遺詠「旅宿花」、「行きくれて木の下かげを宿とせば花や今宵のあるじならまし」を指す。しかもこれを笠寺に持ち出すのは、両人を援ける寂蓮に、六弥太が忠度の最後のさまを語り、この寂蓮と忠度が俊成門下の相弟子であることを判明させ、その援けをえて姫のお産と鎌倉への旅立ちが可能になったことを語るためである。

以上、第二、三、四段の三段は、第一段で設定された、稲毛を妨

害役とする序に変化をもたらし、その解決への歩みを進める〈破〉の段と見ることができる。

最終の第五段では、五弥太を介抱していた猪股が、悪役稲毛にはかられて逐電の身にある六弥太に代わって五弥太に岡部の家名を立てさせるために関東へ下ることを促す。道中、出会った文使いの男が、頼朝が六弥太に切腹を命じるとの偽下知状を道善から寂蓮あて携帯していたのを猪股がとりあげる。猪股・五弥太は、この証拠書類を持って関東へと急ぐ。一方、鎌倉では、頼朝の面前で平家から奪い返した、源氏伝来の名刀の目利きを行なう中、話題が小鳥に及び、その行方を稲毛に質すが稲毛には答えられない。その場にいた熊谷と佐々木が、忠度を討ったのは実は岡部六弥太で、かれが小鳥を持つに違いないと語る。稲毛があらがううちに、寂蓮が六弥太と菊の前を同行して参る。六弥太が経過を語り、短冊と問題の小鳥を菊の前が差し出すが、頼朝は、だからと言って六弥太が忠度を討った証拠にはならぬと言う。稲毛がにんまりするところへ、猪股と五弥太が登場し、稲毛が書いた偽下知状を示して稲毛を追い詰める。怒った頼朝は稲毛を縛らせ、その身柄を岡部に渡し、岡部にはその本領を安堵し、菊の前をも与える。善の側の勝利、大団円である。あとは頼朝が諸大名に太刀をたまわり、

つきぬ源氏の御代、千秋万歳めでたく今につづきけり

と結ぶ。この段のモチーフは、

I　五弥太と猪股による稲毛の偽下知状の実情暴露

J　岡部六弥太の勝利、稲毛の敗北。あわせて頼朝讃歌

である。

ここで注目したいのは、忠度を恋慕して来た菊の前が、頼朝の仲介により岡部六弥太と結ばれることであるが、これは第一段で設定されたA忠度の和歌への執着をかなえさせた、B岡部六弥太の忠度への武士の情けが、この一組の男女の結びつきを実現させたと見るべきであろう。この間、同じく忠度の身代わりになろうとして結局稲毛の手にかかって果てた三日月の悲劇があること、三日月が義理に殉じたことを想起すべきであろう。

以上、全曲の構成を展望して気付くことは、物語に登場する人物の相互の関係である。これが、中世のいわゆる軍記物語や、芸能としての能には見られない、複雑な物語を成り立たせている。その芽生えは、中世舞曲としての幸若舞にも見られたのであるが、この近松のドラマに及んで、その複雑さを一層顕著にしている。この間に時代の義理・人情が入り込んで来ることは言うまでもない。

二　物語と登場人物

本曲のシテをいったいだれと見るべきであろうか。一見して忠度が浮かびあがるのであるが、ドラマが主役と敵役の対立によって進行することを考えると、シテを忠度一人に絞るには問題がありそうである。ここで考えるべきことは忠度と岡部六弥太との関係である。本説の『平家物語』では、この両者が対立を構成するのであるが、

この近松のドラマにおいては、第一段から両人は、むしろ和歌への執着を介して盟友の関係を結んでしまう。忠度はみずからの念願がかなったあと、いさぎよく岡部の刃にかかって死をとげる。この間、三日月と菊の前がからまって、たしかに前半第一・二・三段でのシテは忠度と言えるだろう。しかしこれが後半になると、忠度を討ち取った論功行賞の行方をめぐって岡部六弥太と、これを妨害しようとする稲毛との対決が主要モチーフを構成する。この稲毛を対極におくと、岡部六弥太と忠度は味方同志の関係になる。その意味で第四段における、いわば後ジテは岡部六弥太と見るべきであろう。物語は、対立する両人の一方が舞台から消えることにより終結する。敵役の稲毛が生き続けるかぎり、物語を閉じることができない。そこで物語の後半では、敵役稲毛に対立するシテを忠度から岡部六弥太にずらせる。一方、第一・二・三段の前ジテを救ける、いわばワキ役が菊の前と三日月である。それに岡部六弥太を加えてもよい。後半の第四・五段では六弥太がシテの座を占めることによって、五弥太、盛俊、それに寂蓮がシテを援けるワキやツレ役を演じる。このように考えれば、頼朝の指示にしたがって、菊の前が岡部六弥太に与えられるのも納得がゆくだろう。前半・後半を一貫して貫く敵役が稲毛である。その意味で、近松のドラマにおける、この敵役の存在意義は大きい。この悪役の前に、一部第二段に顔を出して悪役を演じるかに見えた梶原のかげはきわめて薄いと言えるだろう。代わりに稲毛が〈実悪〉の役割を演じるわけである。本説『平家物語』の受容と変容とが、こうしたところにも見られる。

次に本曲の各物語を構成するテクストと、先行する物語テクストとの関係を検討する。

三　物語テクストの受容と変容

あらゆる物語テクストが、先行するテクストを念頭において成り立つ。特に、この近松のテクストの場合、むしろ先行作品を意図的にどのように有効に利用し、物語として再現するかに工夫がなされている。たとえば第二段に登場する二人の女、かれらは海女を自称するのであるが、舞台が須磨の浦であることを思えば、かれらは明らかに在原行平と思いをかわした松風・村雨を意図するもので、事実、近松には宝永三年頃、大坂竹本座で初演を出した『松風村雨束帯鑑』の作もある。テクストの空間が登場人物を選んだと言える。

曲全体が『平家物語』の巻七前半の都落ちと、巻九の一の谷合戦を「本説」とすることは言うまでもない。それも『平家物語』はもちろんのこと、その本説による世阿弥の能『忠度』をも利用していることはすでに指摘したところである。

以下、近松のドラマに『平家物語』の痕跡を拾ってゆく。

第一段で、モチーフA忠度の和歌、勅撰集への執着が本題になることは言うまでもない。忠度が都を出て後、狐川からとって返すことになるのは、本説の『平家』よりは、それによる能『忠度』が『白氏文集』一「凶宅」をも引用して、

さも忙がはしかりし身の心の花か蘭菊の狐川より引き返し

とするのによると見るべきである。その忠度が都をふりかえって、軍兵に

くちおしや平家の運命きはまり、馴れし雲居をふりすて、都のなごりをしか鳴く一の谷の野外に、屍をさらさん無念さよ

と告げるのは、物語の巻九に見られる一の谷合戦での討死を予見したもので、それをあえて先説的に語ってしまうのは、物語の主題が忠度の討死にあるのではなく、上述のとおり、岡部六弥太との約束に主題があることによる。その忠度が、

しばらく忘れし事共有り、是よりとつてかへすべし

とするのを、馬ぞいの吉若が制止するが、それは忠度をして和歌撰集への思いを語らせる、そのきっかけを作るためである。吉若が忠度に語る洛中の状況、

都へは源氏のつはもの入かはり、あれ御覧候へ。四方の山々に白旗白印花のごとく雲に同じ。平家の落人一人もあるまじと、やじりをそろへし軍兵ただ沓の子をうつたるごとし

の「沓の子をうつたるごとし」は、『太平記』のたとえば巻八「摩耶合戦の事付けたり酒部、瀬川合戦の事」で、瀬川の土地で赤松勢の攻めに備える六波羅勢を、

瀬川の宿の南北三十余町に、沓の子を打つたるやうにひかへたる敵なれば

と見られる、軍勢の多いことを語ることばである。近松のテクストは、明らかに『太平記』の語りのことばを使用するものである。馬取りに身をやつす忠度主従が、権現堂に陣どる岡部六弥太の前を通る。そのさまを、

忠度は、馬の口にすがツてかさをかたぶけ通らるる

これを岡部が怪しんで誰何するのも、『太平記』のたとえば巻三「赤坂の城軍の事」で、楠木正成が、寄せ手に落城と見せかけ風雨の中を脱出する。

皆物具を脱ぎ、寄手に紛れて、五人、三人別々になり、敵の役所の前、軍勢の枕の上を越えて、しづしづと落ちけり。正成、長崎が廏の前を通りける時、敵これを見つけて、「何者なれば、御役所の前を案内も申さで忍びやかに通るぞ」と咎めければ、正成「これは大将の御内の者にて候ふが、道を踏み違へてぞ候ける」と言ひ捨てて、足ばやにぞ通りける。

の場面を想定するものであろう。これら『太平記』との関係を直接、書承したものとは言えないであろうが、敵の陣の前を通り過ぎる場の語りとして、この類型を『太平記』もしくは『太平記』読みの軍記語りに得たと見るべきであろう。

忠度は一の谷を待たずして、早くも岡部六弥太に勝負を挑むことになるが、この両人の対決に、忠度が平家一門では教経に並ぶ剛の武者とするのは、『平家物語』を通して知られる教経を念頭に置くものであり、忠度は一旦、岡部を組み敷く。

（相手の）首をとらんとし給ふ所を六弥太が郎等御うしろより

立まはり、太刀ふりあぐれば弓手をさしのべ、上帯つかんで三間計かつぱと投げた。其隙に六弥太さしつたりとはねかへし、

忠度をとつてくびをかかんと笠引ちぎり

として、岡部の郎等の加勢を見、これをはねとばすのも、まったく『平家』の型を採用したものである。ただ『平家』では、ここで忠度は利き腕を切られることになるのであるが、物語として、この後の忠度の行動を考えれば、それをとるわけにはゆかない。一の谷での対決を早々とここに先行させる。それは後半に三日月・菊の前の献身を描くための語りかえであるが、状況の変化が、このように腕切りのモチーフを割愛させるのである。根底に口承語りの物語の構成法があるわけである。

なお組み敷かれた忠度が岡部に怪しまれ

是は扨、色じろ男のかねぐろまさしう平家のきんだちごさんめれ……

と名乗りを促されるのは、『平家』では、忠度ではなく、熊谷に組み敷かれる敦盛の

とツておさへて頸をかかんと甲をおしあふのけてみければ、年十六七ばかりなるが、薄化粧して、かね黒なり

を借用したものである。忠度は、『平家』の敦盛同様に名を名乗らない。ここで岡部が

なのらずはいけどりにしてなわをかくるがいかに

と問うのは、物語の重衡を借用するものである。ここで忠度は意外にも名乗り、

ちか比未練のいひぶんなれども、御へんも武士我も武士、たのむことば無下ならず命をたすけて得させよと、手をあはせ宣へば

と命乞いをする。それは言うまでもなく、忠度としてかねての念願、和歌を俊成に託することを考えて、この場の一時の命をえようとするために他ならない。ただ、この助命のモチーフも、『平家』の越中前司盛俊に組み敷かれながら、命乞いをする猪股小平六則綱の語りを利用するものである。乞われて岡部は、

理にせめられて討ちもせず。大事のかたきを助けもやらず、討ちやせん助けやせんと、ちゞに砕くる六弥太が心の内こそわりなけれ

と迷う。そこへ悪役の稲毛道善が登場し、事情を知って、

是に六弥太、さなきだに関東武士は物のあはれを知らぬとて、人もあざけり笑ふぞかし。忠度ほどの大将が歌の望みかなふうち、命をくれよと宣ふにそもいつはりの有べきか。情しらぬは猪武者、只今たすけて後日の契約相さだめ尋常に討つてとれ、つれなし六弥太合点がいかぬか忠澄と

挑発されるものだから、ついに岡部は忠度を助けることにする。もとより稲毛は期するところがあり、岡部が手を引くところを

道善あまさじ忠度参りさふととんでかゝる

さすが岡部がとっさに稲毛をとりおさえるのだが、この場面は、本

説における、一旦相手に降ると盛俊を油断させて相手を狙う猪股小平六則綱の趣向を利用するものである。そう言えば、『平家』のこの場合には、則綱のライバル人見が接近したため則綱は事を急いで盛俊をだまし討つことになるのだが、近松の場合、この人見に相当するのが稲毛道善の登場である。しかも、この稲毛の挑発がなければ、あるいは岡部は容赦せずに忠度をその場に討ち取ってしまったかも知れない。悪役なりに場面を後へとつなぐ役割を演じているのである。この稲毛のあわよくば岡部の気をそごうとする行動は、これを『平家』の宇治川での先陣争いに、一旦、梶原に先行される佐々木が、目的を達成するために腹帯がのびていると牽制をかけたのと同工である。それに『平家』の人々に相当するのが稲毛であるが、いわばこの功名争いのモチーフは、『平家』でも、諸本によっては、人見が現実にこれを演じて盛俊の頸を奪ってしまう形をとるものがある。猪股はひそかにこれを予知して、盛俊の耳たぶを切りおき、後日、首実検の場でこの耳を示してみずからの勲功であると証明したとする異本がある。南都本と延慶本である。

ようやく俊成邸にたどり着いた忠度を、俊成の娘の菊の前が開門して迎え入れる。これも『平家』では、状況から人々がしぶる開門を俊成が行なうが、近松はそれを登場させず、モチーフCを生かすために俊成の娘に行なわせる。もちろん、これが第三段以後の物語を進める牽引力になるのである。

この俊成邸を深夜に包囲するのが敵役の稲毛である。稲毛は、岡部といつわり名乗り、忠度に、和歌をめぐる約束をはたしたのなら、約束どおり頸を差し出せと迫る。この稲毛が、前の岡部六弥太と忠度のやりとりを知っていたからである。巧みに人の隙を狙う狡猾な人柄を見せつける。だからこそ敵役たりうるのである。なお、この俊成邸包囲の語りも、おそらく『平家』巻十二で、頼朝の指示により判官を討つために上洛した土佐房昌俊夜討の趣向を借りもちいたものであろう。

第二場は、須磨浦内裏。忠度は盛俊を浜に連れ出し、一門の零落を嘆き、昔の在原業平にわが身をなぞらえて思い人はいないと言って悲しむ。それは言うまでもなく『伊勢物語』第九段、京に思い人を残して来た昔男にみずからと俊成の娘、菊の前を擬するものである。同伴する盛俊とは越中前司盛俊、『平家』では猪股小平六則綱の手にかかってだまし討ちにあう平家公達の一人である。おりから通りかかった二人の女を盛俊が怪しみ、これを忠度がとりなしして天皇や女院たちの面前で、その名所づくしを語らせ、これが語りの一つの聞かせどころをなすのであるが、天皇らは祖父清盛の悪業の報いとして逆境に苦しむと嘆く。情けの人を演じる忠度は三日月に情けをかけ、例の「旅宿花」の詠の短冊を与える。忠度の情けに感じた三日月が、実は梶原の指図により内裏の放火しようとしていたとの真相を語る。一方、梶原は三日月が放つ火を合図に内裏を襲おうとし、鹿の皮をかむり待機していた。この場面にも『太平記』的世界を彷彿させる。これは『平家』の逆落しに、判官の軍勢に驚い

た二頭の鹿が坂を落したとの話を生かすものである。これを見回りの上総五郎兵衛らが鹿とみて追い回すうちに、敵のしのびの声と知り、鹿に扮した村田兄弟を生け捕る。

第三段は平山と熊谷の二度の懸けを略述して、大手の生田の森の陣に移る。そこへ岡部の弟、五弥太が名乗り出る。男色の相手役盛俊に見参を乞う。この両人の対決は、『平家』では先陣を争う平山と熊谷父子の敵陣にむけての名乗りと、さらに巻九の前半、木曽義仲の最後のあと、樋口兼光の家来、茅野太郎がみずからの討死を遺児に伝えてもらおうと、一条次郎に声をかける趣向を利用したものである。

やがて盛俊と五弥太が対決し、一同がこれを見守る。ともすれば五弥太の太刀がすくみがちで、ついに盛俊も戦う意欲を失って太刀を投げ出し号泣する。これを見た猪股が五弥太に代わって盛俊と対決、ついにこれを討ちとる。『平家』において猪股は、一旦盛俊に降りその油断を見すましてこれを討ち取るのであるが、近松では五弥太と盛俊の男の契りと、それゆえのためらいをからませ、結果的に予定通り討たれることになるのである。

この後、義経の逆落しを、

かかる所に義経、三千余騎を引率し、虚空をかけるひよどりごへ或平家の城のまん中へ、人のたきつ瀬つくりかけ、逆落しに落せやとあまたの軍兵ときをあげ、石をおこし古木をたきおめき叫んで落しける。

と要約的に語るのは、ドラマをはこぶのに主要人物に絞る方法が、集団戦の、その逆落しを略述にとどめるものである。この後、忠度の恩義に感じていた三日月が身代わりとなり稲毛に討たれる。これが後半、岡部六弥太と稲毛の忠度討ち取りの論功争いの契機をなすのである。忠度が三日月に施した情義が、その返しとして三日月の献身から後半を展開する敵役稲毛の行動原理となるのである。この二つのモチーフの連接に物語が存在するわけである。

第四段では、稲毛の後を追う岡部六弥太と菊の前の東下りの道行、その道中の苦難に、忠度とは俊成門下として和歌の相弟子である寂蓮をからませ、尾張笠寺の法師たちが、寂蓮ともども菊の前を保護する場面は、『義経記』の、義経の北国落ちに同行する北の方の像が濃厚に重ねられていると言うべきであろう。

ところで、本曲『薩摩守忠度』と同じ貞享三年頃、宇治座で上演されたかと言われる『千載集』がある。内容は本曲とほとんど変わらない。ただ悪役の稲毛道善の名を瑞勧とし、三日月を時雨とするなどの小異がある。後者の〈時雨〉は、上述した能『松風村雨』の村雨を連想したものであろう。両曲の関係については、議論があるようだが、同じ近松の作品であることを考える場合、いずれが先行するかということよりも、むしろ上演の方法の違いをみるべきであろう。目立つ異同として、第四段、岡部と菊の前が笠寺に到着し、寂蓮が登場するところに大きな違いがある。『薩摩守忠度』では、笠寺法師が二人を客殿に招きいれもてなすところに寂蓮が登場し、

岡部に八幡参詣をさせてこれを遠ざけ姫と語らううちに姫が産気づくことになるのだが、『千載集』では、岡部・菊の前の両人が御堂の縁に臥して眠るうちに寂蓮が到着し、これも御堂の縁に眠るうちに、その夢に忠度があらわれる。「雨夜の物がたり」に、勅勘ゆえに「読み人知らず」とされた恨みを述べ、俊成にかけあって名を付してくれるようにと依頼する。これは夢幻能『忠度』によるものである。これに『清経』のことばをも取り合せていると言う。忠度は重ねて、この場に臥す二人が俊成の娘と岡部六弥太であると紹介し、みずからが岡部に討たれた次第を語る。やがて寂蓮は目覚める。忠度の語りは寂蓮の夢想の世界であり、その趣向は、言うまでもなく能の構成を取り入れたものである。寂蓮がそれと知って忠度の霊魂をとむらううちに、岡部・菊の前両人も目覚め、寂蓮から、その夢物語を聞いて、笠寺観音の霊験によるめぐりあいに感動する。かくして寂蓮に促されて両人は鎌倉へと歩みを進めるのであった。この構成は、要するに能の趣向を生かし、しかも笠寺観音の利生でわく組を作ったものである。こうした近松の異本テクストの作成が、かれの作劇方法の一部としてあることを注目しよう。

第五段では、猪股の介抱を受けて時節の到来を待っていた五弥太が、岡部家の再興を志して猪股とともに東下りする。道中、文の使者にめぐり会う。これは『平家』の巻十一、四国へ強行渡海した義経の軍が屋島へと急ぐ。その道中、屋島の平家公達に警戒を促す京人からの文を運ぶ男をとらえる物語を、ここに生かしたものである。しかもその手紙の内容を、『平家』における京の文ではなく、敵役稲毛が岡部六弥太を死に追い込もうとする、いつわりの頼朝の下知状で、悪役稲毛の行動が語られるのであるが、しかもこの悪役の行動が、論功行賞に慎重な頼朝をして、急転直下、稲毛の野心を見抜かせる契機をなす。悪役、稲毛自身の行なった行動が、みずからを窮地に追い込むことになり、これを岡部六弥太の側から見れば、大団円を迎えることになるのである。勧善懲悪のプロットがあるわけである。

論功行賞の判断を誤らぬ頼朝の天下平定への讃歌を以て物語を閉じるが、何よりも悪役稲毛の自滅が、物語の幕を閉じさせる。頼朝讃歌は、幸若舞曲など、中世芸能が構える趣向であり、その背後には清和源氏の子孫を自称する徳川将軍へのことほぎがあることは言うまでもない。

五　まとめ

近松の『平家物語』に取材する時代物浄瑠璃としては、とりあげた二曲のほかにも数が多い。本稿は近松論そのものを志向するのではなく、近松における、いくさ物語の受容を表現史的に検討したものである。時代的背景をなす時代思潮や演劇的手法については専門の研究者に十分な指摘がある。本稿で指摘できることと言えば、いくさ物語の再生の方法として、本説をなす先行の物語、とくに『平家物語』の受容に、各種説話の型や趣向を人物の別を越えて自由に

採用し、組み合わせを行なう。こうしたところに近松の作劇法の一部をなす語り物の受容と変容があるということである。その構成法は、口承文芸の、行為としての語りの構成法にも通底するものと言ってよいだろう。語り物の伝統を改めて痛感させる事実であるし、いくさ物語表現史のなかに位置付けしうるわけである。

参考文献

山根為雄「『薩摩守忠度』等の諸問題—加賀掾と義太夫をめぐって—」『女子大国文』一九八二年七月

原　道生「近松」『日本文芸史—表現の流れ』一九八八年四月

森　修『近松と浄瑠璃』一九九〇年二月

白方　勝「時代浄瑠璃における道義性—近松と海音の場合—」『論集近世文学』一九九一年五月